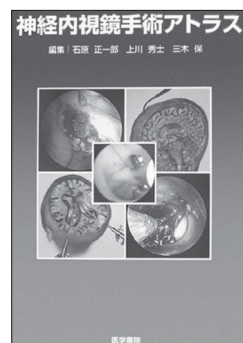


石原正一郎・上川秀士・三木 保：編集

『神経内視鏡手術アトラス』

書評者 富永悌二（東北大学大学院神経外科学分野）



このたび、石原正一郎先生、上川秀士先生、三木 保先生らが編集した「神経内視鏡手術アトラス 第1版」が発売された。神経内視鏡は、歴史は古いものの脳神経外科領域における診断・治療技術としては片隅に追いやられていた感がある。しかし新たな内視鏡機器の開発や技術の洗練によって成熟し、今やある種の閉塞性水頭症では治療の第一選択しとなる程重要な modality となりつつある。本書はこのような流れの中にあって誠に時便を得た企画であり、神経内視鏡を志す脳神経外科医、第一線で神経内視鏡治療に携わっている脳神経外科医のみならず一般の脳神経外科医にとっても大変有用な著書である。

第一章「歴史と基礎知識」では神経内視鏡の歴史がわかりやすく紹介されるとともに、従来の著書では軽視されがちであった device としての神経内視鏡に関する解説がなされている。軟性鏡と硬性鏡それぞれの特色や利点にととまらず、最近登場した脳室内ビデオスコープについても従来の軟性鏡との違いについて解説している。さらに

現在の神経内視鏡手技において最も問題となる止血操作の際に用いられる凝固因子についても各製品の作用原理、生体への影響についてもわかりやすく述べている。

第二章「解剖」は、高画質な内視鏡写真による正常解剖の網羅的解説がなされており、本書の白眉の1つといえる。当初神経内視鏡を始める際には、解剖書のスケッチを頭に描きながら、時として方向や位置を見失いそうになりそうになりながら内視鏡を操った経験がどの術者の記憶にもあると思う。本書の正常解剖を写した内視鏡写真は、そのような状況での的確な「ガイド」というべきもので、それこそ正に編者らが意図するところであると思う。またこれだけ多くの「教材」を提供しうる編者らのこれまでの経験の蓄積と、その提供は敬意に値する。第二章の末尾には「神経内視鏡手術心得10か条」が記載されている。編者らの豊富な経験に裏打ちされたものであり、より安全で確実な内視鏡治療を行う同義的責任を担っていることを改めて読者に喚起している。

第三章の「症例－内視鏡手術」には水頭症、のう胞性疾患、脳腫瘍をはじめとした脳室内病変から寄生虫疾患にいたるまで多彩な症例の呈示がなされている。広く普及しつつあるとはいえ、個々の施設で経験できる神経内視鏡手術の症例数には自ずと限りがある。本書は一般の施設で遭遇すると思われるほとんどの疾患が網羅されており、また個々の症例における手術のポイントやビットフォールも記載されている。神経内視鏡手術の実践の場にあって即役にたつ「ガイドブック」でもある。

最後に、昨年神経内視鏡学会の技術認定制度が発足し、神経内視鏡手術は注目を浴びていると同時に結果に対する期待も大きい。本書が身近な「ガイドブック」となり神経内視鏡治療がより安全で確実なものとなるよう祈念したい。

A4 頁 224 2006 年 医学書院刊
定価 16800 円（本体 16000 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-00149-6]